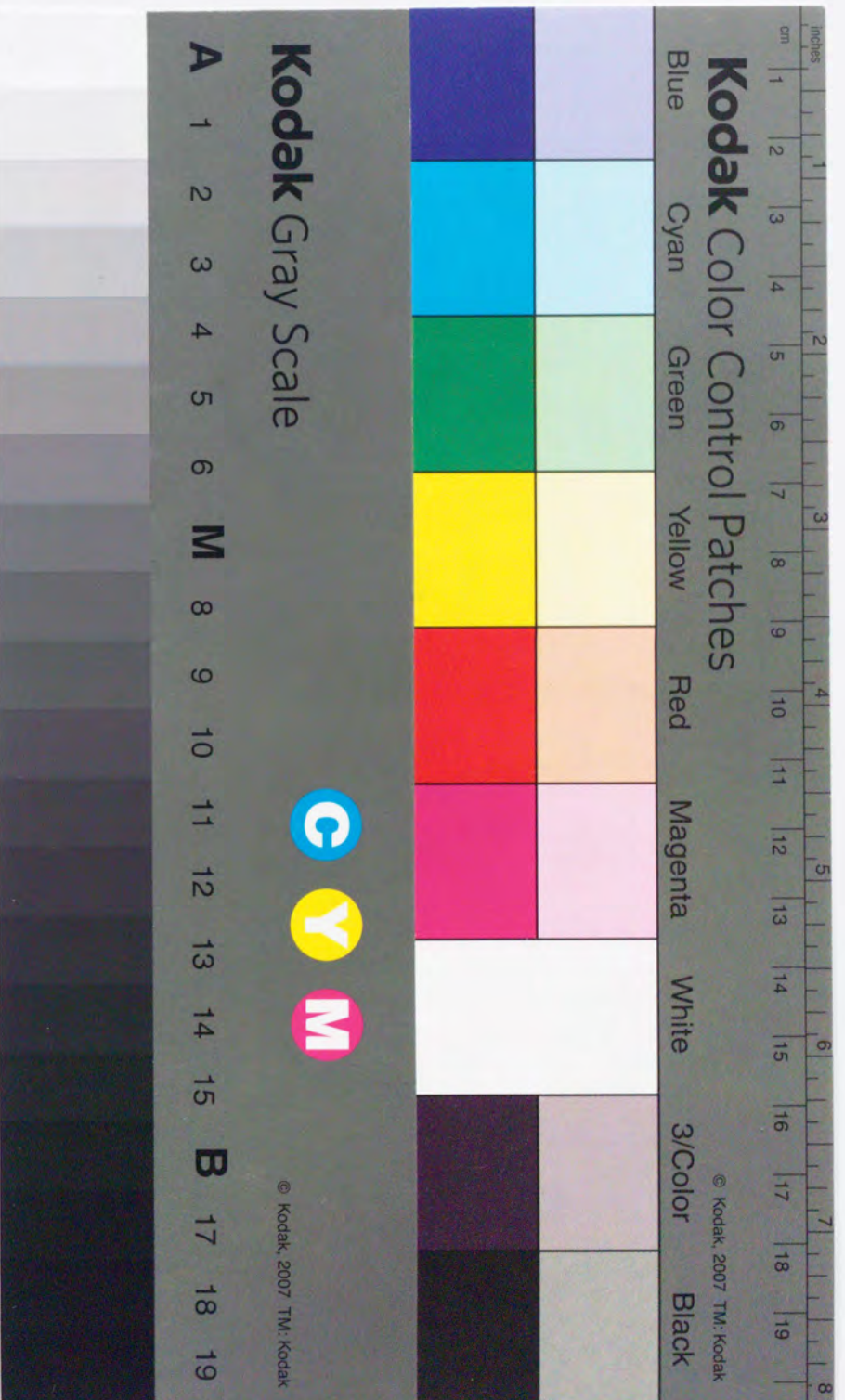




劇場画史序

夫梨園俳優千伎萬態。無有未
盡美與善者也。而其於勾欄會
場。至板松書割戶棚等者。未
風景而已。斯有流光齋
模寫俳優子之

態實逼真。可謂得傳神之妙矣。然亦戲臺壯飭之器。板松佛檀。無充觀矣。因今補其脫落。而苗出山水林樹。其筆力墨妙。愈出愈奇。蓋如圭氏之家。在于四橋下流。而洗錦有年于茲。可驗

流光之名也。此書稿已成。友人綾栗附以鎖語。能盡世之人情。實如雪上添霜矣。號曰劇場畫史。看官每臨戲臺。依此圖。慙。愈知其意味深長矣。享和二年四月江南白舟識



劇場画史序

俳優の初々天竺方神元の岩戸小龍を病に
うらまふ美れ神通是でとけいぬと神會
寄會はし神お坂有て神工風を激し給ひ
神衆議事の上神多聞の跡はし嚴戸のまゝ
神子と参る俳優と初はし王様者を撰みふ
りぬかれし酒席おもむかぬ天細巻り
ての庭道御守大乃野田原がく千早振袖

ひびく一々神樂をぞ参るは是で二〇カ
れ初めると三編の圖をもとをて撰りハ百々
美の神通と神ありりふて笑がり給ひ
神もふふあて神は是と清きふ天竺
ち神も法華寺の雪隠うは是あ
めく神と魂六郎山原きり給ひま
うらうら給ひけり面白やとのみ
よう物とははれと物と嘆息面

神代よりぞげざりたるまゝ此劇場裏の
 この厳たる昔何事をも経たばとふると思ひ出
 そふ其川乃直なるものを穿て生じて今
 劇場の直に見ゆ多しや直なり其境に
 至るはしとふとふととるなりと堀江の
 画にふぐり川やもまゝ劇場の絵に画
 帖に添ふことあり

後之理ある



三階閣
第一重慶壽院籠居
第二重近臣等侍坐
第三重松永久秀氏

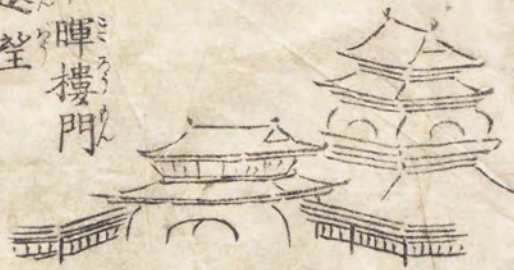


下居橋
俗稱新町橋

久奈倉庫二箇



遠望
汗暉樓門



絹川土橋



梅川卿里催雪



登蛙柳

長栖芦



僧都余波岩
岩隙残舩影

六輔無念石
三寸許地
埋有法

雪持竹延則
爲直用竹力



浦旁七散松
拔法石竹輿

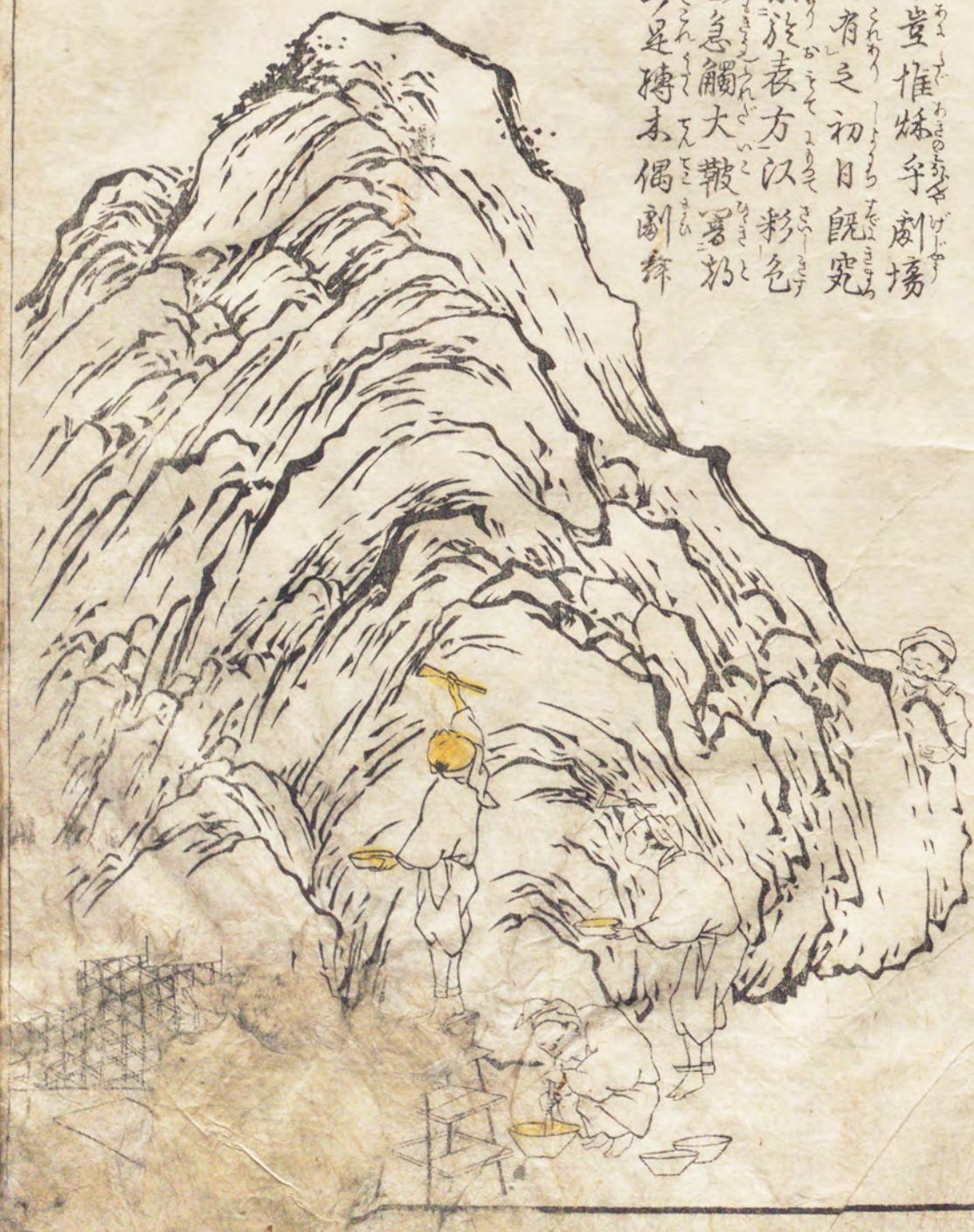


般五良腰
掛石又曰
般若石



三

山嶺豈惟殊乎劇場
四時有之初日既究
而集於表方以彩色
之甚急觸大報焉於
下物是博未偶劇奔



送櫓松

登法
一、枝右掌
採牙二枝
左、手掛三
右、足踏四
左、足踏下

昔長等山櫻

平馬飛頭毒

喻言深山樹

宗任梅

套馴礮

序



劇場画史卷之天

目錄

山水之部

葛城山

壇磯花大樹

芳野川

妹脊山婦女庭訓

義長園

假名手本忠臣藏

南禅寺

金門五山桐

洛北山

久米仙吉野櫻

佐野莊

北条時頼記

墨江頭

祇園祭禮信長記

其二

夏祭浪蒼鑑

其二

傾城青陽鷄

大安寺堤

敵討縊縷錦

信田森

芦屋道満太内鑑

葛城山

重瞳丸

萬里雄膽氣勢豪
一峰頂住白雲高



芳野川

古今集才士
上
山
川
中
の
人
々
の
行
き
来
を
し
る
に
あ
る
を
し
る

夫者所とる和州者所郡一郡の跋扈し北を古所川より南を十津川
 王座と仰て紀州の境迄凡南水と百里餘小雲の郡に西の道あり西を和泉紀伊
 隣りて東を信濃と境にて東西三百里ありて道に不遠
 して金峯といと号しと和勢才の名の靈地あり殊に櫻樹を木敷
 有て六食の間おとせく然と當に億兆の揺花を育て春の頃と自的く
 明瞭くして白芝に興るがごとく満地綿繡を愛美敷浪世界と云
 所池の傍に白善淳光も業所の瑠璃世界をいまで笑するを介り松
 葉の妹と脊心の夏蹟を独人に小翰交せしまがうとそ来由を詳に
 人稀かり予一日因果歴然と閑と閑と肯紀州熊野小直子の庭と
 云ふ有てまきの娘とりの容顔美艷清うはてを近うたまた生質ゆふ
 清姫と号く父の寵をましくくその中乃玉とて傳りけ清姫二八乃
 玉の頃うとよ都見物ふやうに紅が熊野のこ栗とて後と然のわくを
 ねとこむうりと見し月し婿紳家の若実とていふて雲想し思ひの神と

ありぬその頃波津家ごがた半いでたて家國丸てりう條も定(源氏)の
 旧例又倣(まね)ひふ伏し密と愛態(あいざう)の奥にまびとるうり貞(まこと)の貞(まこと)
 が家小(いえこ)備(ひ)へ流(なが)る流(なが)る清姫(きよひめ)思(おも)ひ成(なり)て人の来り給(たま)ふと
 收(と)りて折(せ)る同(どう)十八(じゅうはち)日の内(うち)康(やす)瀬(せ)氏(し)收(と)り清姫(きよひめ)ふうく思(おも)ひ保(たも)に
 姫(ひめ)の瀬(せ)ぐさるをいふとより波(なみ)あまの志(こころ)のびまゝ海(うみ)次(つぎ)と歌(うた)内(うち)應(こた)へを
 たりり貞(まこと)司(つかさど)姫(ひめ)の愛(あい)着(き)より大(おほ)事(こと)と引(ひ)きと思(おも)てあまなくも清姫(きよひめ)と
 ろ定(まこと)の清(きよ)乃(の)不(ふ)殺(ころ)害(がい)人(ひと)又(また)貞(まこと)國(くに)津(つ)の太(おほ)和(わ)の公(こう)條(じょう)に萬(よろず)事(こと)とつる者(もの)
 わりその母親(はは)性(さが)質(しつ)を要(もと)ふありす七(なな)側(わき)室(むろ)小(こ)の勝(かつ)といふ
 より端(は)標(ひょう)正(ただ)しく貞(まこと)賢(けん)ありて顔(かほ)色(いろ)十分(じゅうぶん)かりむす七(なな)がやけ
 且(かつ)於(お)通(と)といふる二(ふた)女(に)史(し)と没(もく)けて年(とし)有(あ)而(を)す七(なな)母(はは)この
 一(ひと)とあふこれとも老(お)婦(ふ)の要(もと)ふかりむより媳(よめ)婦(ふ)に因(よ)る
 義(ぎ)理(り)結(むす)ゆと之(これ)勝(かつ)と断(と)縁(えん)より及(およ)至(いた)る勝(かつ)い史(し)と序(しよ)り於(お)國(くに)
 滋(し)姑(こ)息(いき)の婦(ふ)人(ひと)代(しろ)情(じやう)よりるをある武(ぶ)人(ひと)が中(なかつ)と生(なま)れよりるを殘(のこ)る
 小(こ)義(ぎ)の拘(こ)りて埋(う)りて失(うし)はれま七(なな)をの年(とし)といふまを多(おほ)くと離(はな)れといふ

法則を以て因をさし於る因を去りて之勝を以て之を
 何んぞ不さるる事ありんや下勝之勝姑の毒舌不繫て不意の又か
 見よく後世す七が母と雛をくくく之勝を定言と存る之真の因
 久我の助清如清姫と大判更清姫と再生る清姫清姫の名をたたる
 姫乃をねねとる事思ひだす清姫之勝も満生師忘して大判
 母七が母再生の久我の助と雛をくくく之勝を定言と存る之真の因
 とそ業報因果歴然たる事明くけし原來之勝清姫とも世との
 重着の罪のしめと節操をくくく之勝を定言と存る之真の因
 とあり二子を害次而と親庭のわたり又久我の助雛をくくく之勝を定言と存る之真の因
 誓ひ海を過て契りしも後世借老の思ひと空しくくくく之勝を定言と存る之真の因
 大目萬屋の母も清姫之勝をくくく之勝を定言と存る之真の因
 以てそ恩恵の二子を苦小判首て吉野川はけりね紅葉散れたり
 或人これと悔く
 かきとて妹脊の二乃なりふありくくく之勝を定言と存る之真の因

或同之清姫は愛成男子の大判更清姫と再生又之勝を以て之を
 定言と再けりこれ佛記も兼く的たる應報後若回答とて
 之勝の女婚をくくく之勝を定言と存る之真の因
 人倫の紀綱をくくく之勝を定言と存る之真の因
 満て清姫と國家のわふ父親のわふ忠死し家小記をくくく之勝を定言と存る之真の因
 成男をくくく之女二男の再生二女二男の因なり大判更清姫の
 妹と脊の二乃を備てそ業を債のくくく之勝を定言と存る之真の因

山科義臣図

山科を京都の山科と西の村大星氏隠栖の旧趾あり
 不戴天の仇と報せんとの計略の乃整居やとて隠栖あり
 武里大佛殿の東南智積院の南側とありとて隠栖あり
 かく鎌倉の西の村とて推しきて来ても栖るに勝るなり
 ねやさく岳山とて大比叡やとて来ても栖るに勝るなり

伏見撞木所
每至空處之
天升落書



今日之達遊
君過光陰時
日尚不可辨
思君急拂
袖伸一後世
人久不許還
留亦過三夜也
大里書



名ふわん琴引の家の松風吹うひつと邸日所中んや花撫が葉釣目
と世とる作川のの清に春のわしこの涙ふの處常梅柳花影るゆを交
へ涯里のわんき秋の紅葉ふ小男麻のこふ衣を枕の床か
業のあふふ葉で眠うふ鼻うむ臼枕のふあびつるゆへ車の若
ふむふあやふんきとふふはうねてふかう清く月月の傾く西の山村
と四つふ小涙のふさる致系ふて大甲氏も罷さくして配所の月を
見んとふめたるる放ふそ物々見とてわん涯の春の向ひ乃
と古きと吟じて歌息せしむ之板歌ふ油ひをこせへ方便小月に浮り
花ふ吟うい或はたへ祇園下河原橋を枕して路傍より又或は
系ふる妻の軒女う方ふ夜明のふさる小伏見の妻町ふさるを町と
うりてと揚屋毎屋を傍るるそ大高酒具をきうて左邊の天井ふ
落書せしむ又の画ふ小記とそ後は毎屋次を傍るる妻町不經紀り
ありしよりはやと退しう右落書せしむ一夫井と大坂の或好ま
家の坪荒とそをよりと安ぬ又そ順糧本町ふ揚屋ふ軒有しうや

む寶曆の末に之背の象と多るごりか安永天明に頃とて退し今た如
荒廢とらるね板いふの西渡と林又市席といふる浪人有るがな多廢
元年小伏見の町に田町と云ふ傾城町と云ふなりそ後大坂次より
經昌と云ふ左波林又市席も大坂に引移て安ふらるるを又ふらるるり別
伏見又市町と云ふ後又武蔵所替有りて又今の瓢箪町と云ふ板屋
九年甲辰十二月ふ後通掃初最系八處と云ふ人新に撞く所のうらるるを
ふらるるりむあふとる所と云ふ又そそ中右美町と大星氏にたは揚屋

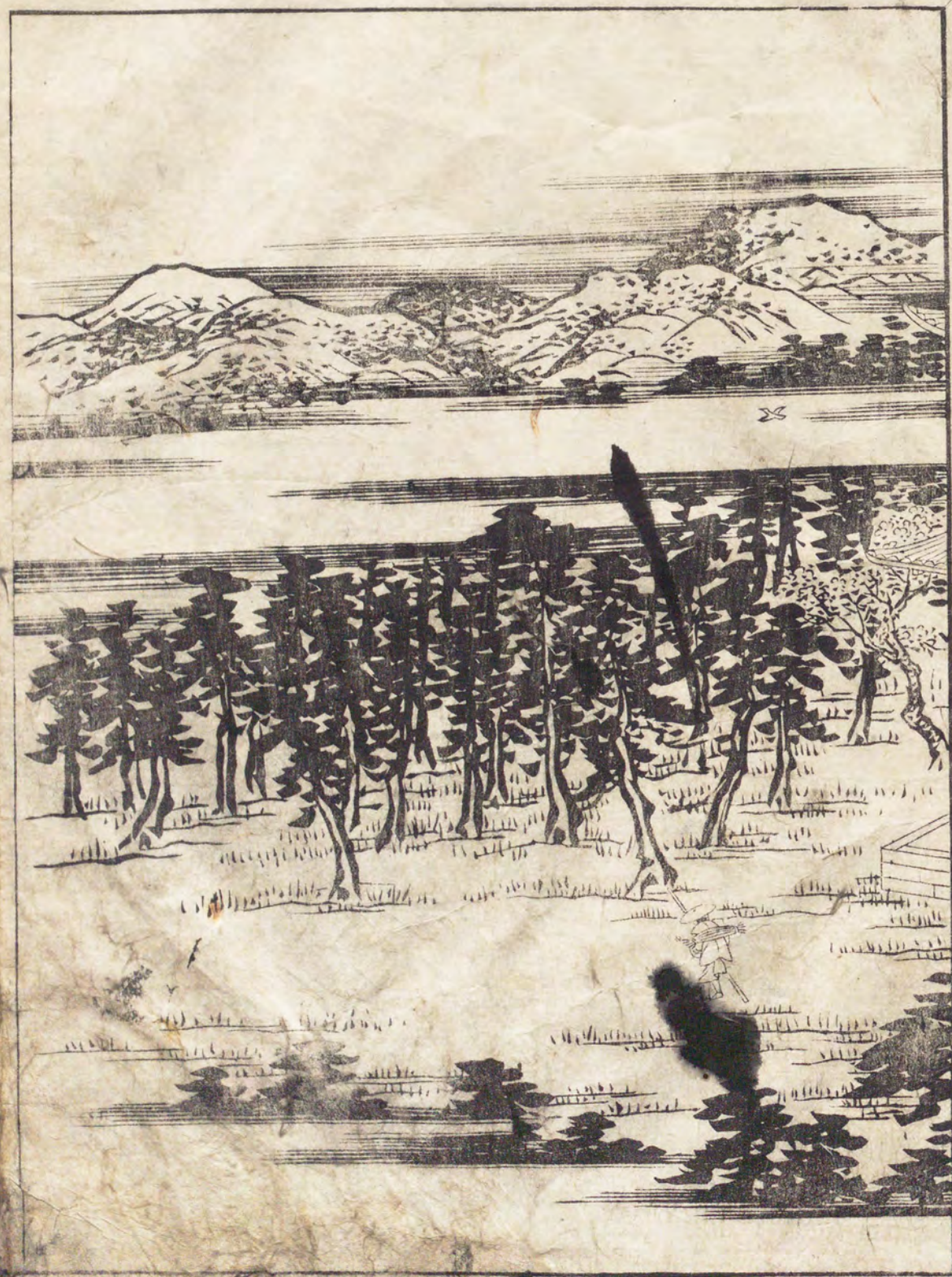
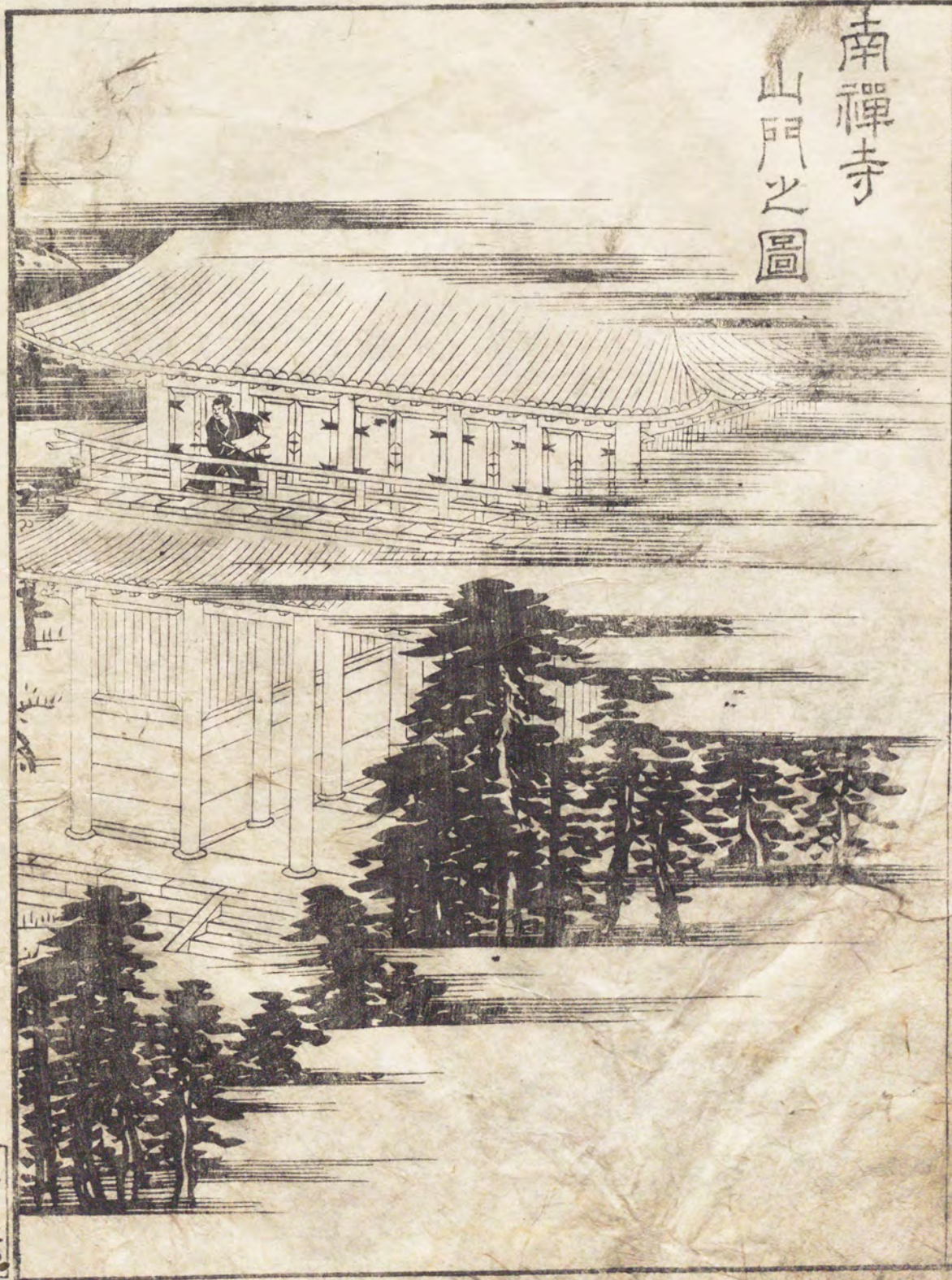
西側 八幡屋次を傍 毎屋次を傍 江戸 長き橋

書のか

前系八處 松中八處 辻村表屋 桔梗屋宿屋 八番

八番表屋 妙長尾 左九郎 右者元禄の頃の揚屋傾城をりうとや記さう 或人の軒ふとるを
圓ふわんし侍る

南禪寺
山門之圖



と虚その雷よりや二陽東後の新程言幾世交る長きものたよ
筆に在作者の寝云とや中とのやふた

大明宋蘇卿叛逆顯レシ時ニ子蘇友一
遺意ヲ告ニ爲蘭奢待ナ炷シ香氣薫シ
ケルトキ飛去シ白フノ鷹脱ノ画軸



此鷹後二本ゴトクニ歸テ世ニ徽宗帝ノ
鷹トテ珍重スハ脱ニナリシヨリ世ニ白フ
タカト稱スルハ是ナリ

玄界島碑銘宋蘇卿題
早川高景陣羽徽宗縮

江南一枝松
江北二株橘
都御金領杖
束繁
宋蘇卿

元来有口更無言
毛頭擁丸痕一却不生
坐進十方諸佛出身門
一休禪師鳳凰靈臺贊
川市紅

元来有口更無言 一休禪師の作にして女へのはなを頼りて
毛頭の毛頭擁丸痕一却不生 毛頭擁丸痕一却不生
坐進十方諸佛出身門 坐進十方諸佛出身門
一休禪師鳳凰靈臺贊 一休禪師の作にして鳳凰の靈臺を
川市紅 川市紅



劇場篇曰
 雷子字嵐
 三人多
 藝好為狂
 言每稱女
 哉本我京
 抄贊曰由
 男有滅法
 之疾雷子
 有女哉之
 癖一





署江頭



其二



其三



大たい安あん寺い塘づゑ

和州上郡大安寺より南七太寺の二ふて原の市街間の清水の
 少り青の底へおれお地とうやういひふるふの寺が毎塚へるも柏木俵の
 衆秋篠は動未肌に見へ候と勝常とてお元とてさき寺ありても度れ
 云々小回縁と断縁うたひ慶長の末に堂舎二宮ありて一は是も西蔵のふ
 破壊して遷移し今を野とておそく抗東の柵をさるる爰は青より北へ延び
 半蹟移るの云焼區よりてまゝ焼成に成るる一は游歴の頃郡を過るた老
 に身ゆりし小とてあやうき後を續せざるゆゑて定より小たたをさるる一は
 云々下と筑後國之留年の先と因縁を初め痛友ははし家老職の人ありて
 筑後川の河原濱にて害討小合ありて死骸腹よりて刀ふはとくはに殺害せられ
 俵の老に云々無僕とて富秋の櫓よりけり場を拒むる割攘はる殺害せり
 不届小紅馬石家後とて追殺之故より具仇討し少くといへども具次は死親族も
 と思は有とい不通かじ左子具次も実名ふたふた無是死乞食とて祈り方敵と尋
 小和州郡に潜るゆを要せし郡への就る當九條といふる垣井村よりてせ

犯人番とて敵と称しひり敵とて家の家中に居る所小若侍とて下ひ
 防備の助力と頼むに甲十斗加勢とて助力の士の内此處に敵と稱し者入込
 かりに突出— 密に彼犯人とて殺害せん所に令か多かきに令せり左彼犯人
 の面ももをけり左犯人も僅の一月は— ばりて令に別衆とていふべきもの
 月日を送りたりそに同ド家中に矢田筋といふ處に居せり— 市武蔵といふ
 赤棟のほうとて思ひ且に犯人の次郎とて名を稱しとて憐れとて密に令か多
 かりに突出— 密に彼犯人とて殺害せん所に令か多かきに令せり左彼犯人
 の面ももをけり左犯人も僅の一月は— ばりて令に別衆とていふべきもの
 月日を送りたりそに同ド家中に矢田筋といふ處に居せり— 市武蔵といふ
 赤棟のほうとて思ひ且に犯人の次郎とて名を稱しとて憐れとて密に令か多
 かりに突出— 密に彼犯人とて殺害せん所に令か多かきに令せり左彼犯人
 の面ももをけり左犯人も僅の一月は— ばりて令に別衆とていふべきもの
 月日を送りたりそに同ド家中に矢田筋といふ處に居せり— 市武蔵といふ
 赤棟のほうとて思ひ且に犯人の次郎とて名を稱しとて憐れとて密に令か多





慶子古稀賀
國丸
葛の葉子
けり
まけり
人
化
古
稀
の
森



